

聖霊降臨後第20主日(特定23) 2010/10/10

聖ルカによる福音書第17章11節-19節

於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

ルカ福音書の大きな特徴の一つは、イエスさまが弟子たちと共にエルサレムに向かって旅をする、その長い旅路を描いていることです(9:51-19:27)。ルカは、この長い旅の記事の中で、この旅がエルサレムに向かって進んで行く歩みであることを、読者に思い起こさせるかのように、所々に注意書きを挿入しています。今日の福音書でも冒頭に、「イエスはエルサレムに上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた」と書いて、エルサレムに向かっている旅であることを確認し、今、その旅路がどの辺りにあるかを記しています。

今日の箇所から、その旅の終わりの部分が始まります。その割には、まだサマリアとガリラヤの境界沿いを旅しているのかと、疑問も生じますが、今日の物語にはサマリア人とユダヤ人が登場するので、その話の糸口として、このような書き方になっていると理解してよいと思います。

物語自体は、極く簡単な筋書きです。10人の重い皮膚病を患っていた人々が、村に入っていくとしたイエスさまに憐れみを乞います。イエスさまは、この人たちに、祭司のところに行って、自分の体を見せなさいと命じます。祭司のところに行く途中で10人も清められ、その内の1人だけがイエスさまのもとに帰ってきて感謝をした。その一人はサマリア人だった、という物語です。

重い皮膚病に罹った10人の人たちは、遠くの方からイエスさまに呼びかけています。この病気に罹った人は、祭司によってそれが重い皮膚病であると判定されると、町や村の中で生活することが許されませんでした。(レビ記 13:45-46)

重い皮膚病というのは、かつては、「らい病」と訳されていました。重い皮膚病、すなわちハンセン病と全てについて断言してよいか疑問がありますが、この病気に罹ることで、厳しい差別を受けねばなりませんでした。

現代でも、ハンセン病の元患者の方々に対して、正しい知識に基づかない偏見や差別が、根強く残っています。元患者さんたちが提訴した国家賠償訴訟に対して、国の責任を認めて賠償金の支払いを命じる画期的な判決が、十数年前に、ありました。1956年に、ハンセン病は隔離は必要ないという、「ローマ宣言」が出されたにも関わらず、日本政府は「らい予防法」に基づいて隔離政策をとり続けてきたのです。

この判決後も、ある温泉に泊まりに行った元患者さんたちが宿泊を断られるという事件がありました。まだまだ、いわれのない差別や偏見がまかり通っているので、聖書の時代には、原因不明の重い皮膚病に対して、宗教的な汚れの観念が結びついて、苛酷なまでの非人間的な扱いがなされて来たのでした。最も恐れられていた伝染性の病気から社会を守るために、手っ取り早い処置として、やむなく排除せざるを得なかったという弁明がなされるかも知れません。でもそれは、この病に罹らなかった側の論理でしかありません。

社会の中から追い出されて、帰ることが許されなかった人々にとっては、その苦

しみはわたしたちの想像を絶するものがあつたでしょう。親兄弟から捨てられ、肉体が次第に蝕まれていく中で、神さまからも見捨てられてしまったという、絶望的な思いに捕らわれたことでしょう。同じ病いの人々と苦しみを共有することだけが、唯一の慰めであつたかも知れません。

この10人は、「イエスさま、どうかわたしたちを憐れんでください」と遠くの方からあらん限りの声を張り上げて嘆願しています。「わたしらの苦しみを分かってください」と叫んだのです(『小さくされた人々への福音』)。自分のことを分かかってほしい、これはわたしたちの心からの願いでもあるのではないのでしょうか。生きることの困難さを覚えるときに、そこでただうずくまるほかない自分のことを、心の内を、共感をもって受け止めてくれる人が1人でもあるなら、どれほど癒されるのでしょうか。くずおれた中から再び立ち上がる力が与えられるのではないのでしょうか。

話は変わりますが、ヘンリー・ナウエンという、カトリックの神父さんがいます。10年ちょっと前に事故で亡くなられた方です。日本でも著作が数多く翻訳され、大きな霊的影響を与えています。大変有能な学者でアメリカの大学で教えていましたが、55歳になってから大学教授の地位を捨ててカナダの知的ハンディを負った人たちと一緒に、ラルシュ(方舟)という名前の共同体で共に暮らすことを選び取った人です。そこに移る前に、1年間、自分自身の使命を確認するために試験期間を過ごすのですが、その時の心の中をあからさまに綴った日記があります(『明日への道』)。

その中に、グレゴリーというハンディを負った人の話が出てきます。グレゴリーは、4歳の時に脳卒中で右腕が麻痺し、ある町の精神疾患の人々のための施設に入れます。そこで20年間、数百人の知的ハンディを負った人たちと一緒に過ごすのですが、いつも悲しんでいました。両親は3週間ごとに会いに来てくれるのですが、何故、自分がそこに入れられたのか分からなかったからです。その施設では、プライバシーは全くなく、自分の服もありませんでした。他の収容者が着古した服をいつも着ていました。とても寂しくて悲しくて、よく自殺を考えました。

それが5年間にラルシュに移ってきて、生活が一変するのです。初めて買い物にお店にも行ったし、台所に立ってお料理もしたのです。「とても緊張しましたがみんなが、美味しいと言ってくれました」と、グレゴリーはその時々の様子をスライドに写しながら、ナウエンに語ったのです。最後に、そのハウスの全員がロウソクを囲んで座っているスライドを見せて、「これは夕べの祈りのために集まっているところです。前の施設ではそんなことは1度もありませんでしたが、ここではわたしたちは家族です」と話しました。それを聞いてナウエンは、ラルシュ共同体の霊的賜物について深く学ぶのです。「ラルシュ共同体は、打ちひしがれた人々に家庭を提供し、この人たちに生きる尊厳や自分にはかけがえのない存在だという新しい意識を与えている」ことを知るのでした。

福音書に戻りますが、10人の重い皮膚病の人たちの内、1人だけがサマリア人でした。ユダヤ人とサマリア人の関係は、お互いに憎しみ合い対立していましたが、この10人は一緒に生活していたようです。何故、そんなことができたのでしょうか。この病いに罹ったために、社会から同じように差別されることになって、ユダヤ人とサマリア人の区別や差別を捨てて、苦しみを分け合うことになったのではないか。

病いと戦いが部族的対立や分裂の壁を乗り越えさせて、一つの群れを形成させたのではないか、という解釈があります。(『ルカによる福音書3』、『説教者のための聖書講解』57)

しかし、わたしには人間の差別意識というのは、どんなに苛酷な状況の中にあっても、その状況の故に乗り越えることができるものだとは思えないのです。それ程、差別というのは深刻なものだと思います。ですから、差別と闘うということは、自分の中に意識的にも無意識的にもある差別とまず第一に向き合い、根気よく永続的に取り組んでいかなければならない課題だと思っています。

もう40年以上も前のことになりますが、学生時代に一度、九州の筑豊炭坑に行ったことがあります。1950年代後半から、日本の社会にエネルギー革命が起こって石炭産業が斜陽化し、多くの炭坑が閉山となりました。そこで働いていた人たちが職を失い、新たな転職先が見つからずに残った人たちが、そのまま炭住に住んで、生活保護を受けながら、時折、日雇い労働に出かけるなどして生活していました。各地の基督教の大学に「筑豊の子供を守る会」という会が組織され、夏休みに筑豊の子供たちと子供会などの活動をしていました。

ある時、現地の世話係のようなおじさんが、一緒に来いというのでついていったら、遠くまで見るところにわたしたちを連れて行って、そこで山の中の一軒家を指して、あそこには被差別部落の出身者が住んでいると言って笑うのです。わたしはその頃、部落問題について殆ど何も知りませんでした。ですから何を言っているのかよく分からなかったのです。しかし、その時に感じたことは、仕事の面でも経済的な状況に於いても同じような状態にある人間が、もう一人のその点では同じ立場にある人を捕まえて、どんな理由からか分からないけれども、蔑んだり嘲笑ったりできるのだろうかという疑問と怒りの気持ちでした。

このようなささやかな体験を通して、この10人の重い皮膚病の人たちを考えると、サマリア人は他の9人とは離れたところにいたのではないかと想像するのです。9人のユダヤ人から対等には扱ってもらえなかったのではないかと思います。社会からも同じ病気の人たちからも仲間にしてもらえず、一人で苦しみを負わざるを得なかったのだと思います。この人は二重の差別の苦しみに置かれていたのです。イエスさまに呼びかけたときも、9人のユダヤ人の後ろから、どうか憐れんでくださいと叫んだことでしょう。

イエスさまの、祭司のところに行って体を見せなさいという命令に従って、そして清められることを信じて、このサマリア人も9人の後についていったのです。その途中で、全員が清められたことを知りました。ユダヤ人は、その証明をして貰うために、そのまま祭司のところに行きました。しかし、サマリア人は証明を受けられる立場にはありませんでした。清められてもユダヤ人社会の中では差別の仕組みが厳然として残っているのです。

その時、この人が気付いたのは、そのような人間社会の差別を越えて与えられる神さまの憐れみです。ユダヤ人だから、サマリア人だからという制約を超えて、10人とも清められ癒された、その出来事の中に示された神さまの慈しみを見たのです。神さまが自分のいのちを愛おしんでくださっていることに気付いたのです。皮膚の表面が癒された、清められたというだけで終わってしまうのなら、それは御

利益信仰です。その出来事の奥深くに、一人一人に注がれている神さまの慈しみを、サマリア人は見たのです。神さまがいのちの交わりの中に招いてくださっているお恵みを見たのです。信仰の眼差しが自分の上に働く神さまの御業を見ることを可能としたのです。だから、そのお恵みに応えるために、感謝と賛美を捧げるために、イエスさまのもとに戻ってきたのです。神さまの憐れみを知ったから、この人は立ち上がって、人生を歩んで行くことができるようになったのです。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った」と言われる所以です。

わたしたちは、聖餐式の感謝聖別のお祈りを、「感謝と賛美はわたしたちの務めです」と言って始めます。そして、繰り返しこの「感謝と賛美」という2つの言葉を唱えて祈ります。わたしたち一人一人の命に関心を持ち続けていて下さる神さまの憐れみに応えて、感謝と賛美の中に自らをお捧げすることが、わたしたちの礼拝です。

わたしたちもまた、神さまの憐れみに目が開かれて、この礼拝が感謝と賛美に溢れたものとなるように祈りましょう。